

技能 と 技術

ISSN 0385-2253

平成4年11月1日 発行

通巻第157号

職業訓練技術誌

6/1992

特集 ● 職訓短大における実践技術者の育成



Vol.27

ヒマラヤ通信

大阪職業訓練短期大学校

久米 篤憲

1. はじめに

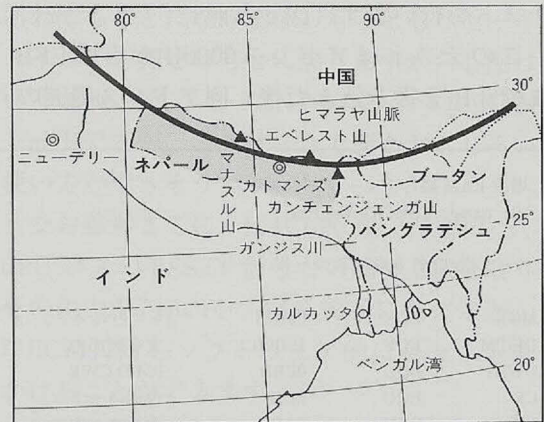
私たち職業能力開発業務を担当する職場では、国際社会への参加や貢献の意味で、JICA（国際協力事業団）より専門家として海外へ派遣され、また海外からの研修生を受け入れる機会がますます増えていく状況です。

そこで、今後海外へJICAの専門家として派遣される方々に少しでもその参考になればと思い、また海外での生活や業務に関心を持たれている方々に、より興味を持ってもらうことを願って、私のネパールでの3年間の派遣期間（1988年12月20日～1991年12月19日）の様子を、業務編、生活編などの話題で紹介したいと思います。

2. 業務編

2.1 専門家の派遣形態

私たちがJICAに出向する期間中の身分は「派遣専門家」と呼ばれます。そして、1年間未満派遣される人を短期専門家、1年間以上は長期専門家になります。また、途上国からの要請に合わせて、数人がチームを組んで実施するチーム派遣（プロジェクト技術協力等）と単独で派遣される個別専門家に区別されます。ちなみに私の場合は、長期個別派遣専門家でした（2年契約+1年延長）。



2.2 派遣目的

「ネパール工業省家内工業局の運営する技術訓練部の訓練業務の近代化および機能強化」という目的で派遣されました。

そこで参考に、ネパール政府の工業化の目的を以下に紹介します。

- ① 工業分野のGNPに対する貢献度の拡大
- ② 基本的工業ニーズを充足する類の製品開発拡大
- ③ 雇用機会の創造（92%を占める農業人口の余剰労働力の吸収）

2.3 家内工業局の紹介

工業省の指導のもと、首都カトマンズの本局を中心に全国に75の支所を持ち、主な業務は、家内工業育成を目的とした技術者養成訓練および、工業サービス業務と呼ばれている家内工業・小工業レベル企業の登録と機械設

ネパール基礎情報（日本との比較表）

| | ネパール | 日 本 | 備 考 |
|----------|----------------|---------------|------------------------------|
| 国土面積 | 141 | 378 | 1,000km ² 北海道の2倍弱 |
| 人口 | 18,442 | 123,116 | 1,000人 1989年 |
| 人口増加率 | 2.5% | 0.5% | 1985～89年平均 |
| 乳児死亡率 | 128.0(1985～90) | 4.6(1990) | 出生1,000人当たり |
| 人口/医師 | 30,220 | 660 | 1984年医者1人当たりの人口 |
| 人口/看護婦 | 4,680 | 180 | 1984年看護婦1人当たり人口 |
| 平均寿命 | 男50.88 女48.10 | 男75.86 女81.81 | ネ：1981年 日：1990年 |
| 成人の識字率 | 29% | 99% | 1988年 |
| 1人当たりGNP | 170 | 23,730 | US\$ 1989年 |

「世界国際図録1992-1993」より

備や材料などの輸入に関する手続きや許可、開業や施設拡充の監視・指導・融資の認可、経営相談などです。

技術訓練の形態は職種によって異なりますが、機械課の場合は高校卒業者への2年訓練およびその修了者の中から成績優秀者への高等訓練を1年追加するものでした。他に、電気、織物、縫製、手すき紙製造、カーペット織り技術、編物、陶器などの訓練が実施されています。

2.4 日常業務

- ・機械課、課長（カウンターパート）への訓練指導業務の指導
- ・5名の訓練指導員への訓練指導技法および機械技術移転
- ・カリキュラムの再検討
- ・教材開発
- ・調査研究（地場産業、雇用形態、教育制度や実態など）
- ・機械設備、工具、教材などの整備
- ・その他

2.5、ネパールの工業発展および人材開発を妨げる要因

- (1) 「原材料入手が困難な内陸国であり、貿易と流通を近隣諸国に大きく依存しなければならない」

ネパールの北はエベレストをはじめ8,000mを越えるヒマラヤ山脈の峰々が中国との壁

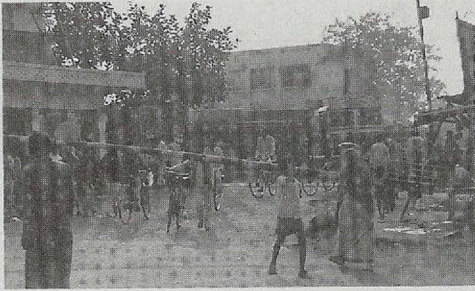
をつくり、東・南・西はインドとの国境です。インドにとってネパールはインド製品の都合のよいマーケットで、経済的植民地といっても過言ではありません。

また、インド以外の第三国から原材料や機材を輸入する場合も陸路でインド国内を通過せざるをえず、そのため両国には通商・通過条約が交わされています。そのインドに有利な条約に対してネパール政府の不満が1990年の条約期間延長承認拒否となり、インドからの国境封鎖という経済処置を受け、燃料不足のため工場閉鎖をはじめレストランやホテルの一時営業停止という経済的な大打撃を体験しました。

(2) 「天然資源が乏しい」

ネパールの資源といえば、世界の最高峰エベレストをはじめとした観光資源、ヒマラヤ山脈から流れ出る豊富な水資源、インド国境のタライ平原の穀倉資源くらいのものでしょうか。

しかし、水資源は、インドとの友好条約によってネパールを流れる川の開発を制限されています。それはネパールの水が、やがてインドの「聖なる川インダス」に流れこむためであり、インドにとっては水を止められると農業や水力発電などで経済的な打撃を受けるからです。また、インドの信心深いヒンズー教徒にとって「聖なる川インダス」の上流を汚される（開発）ことは耐えがたいという宗教的背景もあります。



国境の街ビラトナガル。遮断機の向こうはインド

現在のネパールは、内陸国としての要因も含め、豊富な水資源も思うように生かせない宿命を持っているのです。

(3) 「社会開発事業の立ち後れ」

ネパールはヒマラヤ山脈の中央に位置しており、南北の幅200kmに高度差8,000m以上という傾斜があります。その東西に細長い国を大小無数の川が谷を削っています。国の経済発展のためには川に橋をかけ、国土の東西南北に道路網を整備して国内輸送を便利にし、物の需要と供給のバランスを保つ必要があるのですが、地形的要因、そしてモンスーンという気候的悪条件が重なって社会開発事業は大きく立ち遅れています。

(4) 「勤労・勤勉意欲を妨げる社会的体質：カースト制度の名残」

現在では、カースト制度そのものが崩れつつあるように見え、また、多くのネパールの友人たちがそれはなくなったと言います。しかし、カースト内での見合い結婚が90%以上を占め、公務員の多くは上位カースト者であり、基礎教育にも大きな問題を残しています。

(5) 「基礎教育の現状」

中国・インド両大国に挟まれたこの国は、多数の部族によって構成され、中でもネパリー・ネワール・グルン・タマン・シェルパ・タルーなど、約23の大きな部族が存在し、それぞれが部族語を生活用語としています。国語は最多民族のネパリー語であり、学校教育もネパール語として教科書に使用されています。ここで問題になるのは、人口の58%は



ジュートを運ぶ牛車（ビラトナガル）

ネパリー族で、残りの42%が異なる部族語を持っていることです。そのことがどのような結果につながるかといえば、小学校1年生修学児童数の半数以下しか翌年2年生に進級していません。部族語で生活している42%の国民子女にとっては授業が理解できない、ということが大きな原因です。

そして、人口増加率2.5%以上という大きな伸びから想像できる失業者の増加、学齢期児童の労働従事（例えば、家畜の餌刈り、水汲み、子守りなど）そして、1人当たりのGNPが170\$という国の経済力では教育制度の確立・施設の拡充・教師の養成等、金のかかることは自助努力の限界を越えているのです。

(6) 「雇用形態の問題」

正常な雇用方法とは、採用希望者の能力・経験・人格・適性等を基準として採用し、その被雇用者の労働と時間を買取るものだと思うのですが、この国の雇用形態は前出のカースト制度の名残のためか、組織内での業務の効率・経済性等を犠牲にしても縁故者雇用です。

縁故とは親族等の血縁とカーストや同郷等の地縁等を言うのですが、これも合理的な範囲であればチームワークを保った助け合い的な組織となりプラスに働くのですが、そのほとんどが限度を越えた状態です。限度を越えた状態では、仕事はできないが組織の上層部とつながりを持った余剰労働者が、お互いに仕事とその責任を譲り合いながら組織をむし

ばんでいます。これは特に公務員の組織に目立っています。

このほか、税金制度、水・電気の非効率的な事業運営など問題は山積みです。

3. 生活編

1988年12月、年末の慌ただしい中、私たち一家は成田空港を飛び立ち、タイの首都バンコクへ向かいました。空路約5時間、翌日再び空路3時間ほどでネパールの首都カトマンズに到着しました。

日本との時差が3時間15分、沖縄県とほぼ同緯度に位置するネパールの気候は、12月なのに半袖でも汗が流れました。標高1,300mのカトマンズ盆地は、朝晩の冷え込みがきつく、1日の気温差が25度以上の日もあります。

3.1 健康管理

「海外では日本の物差し（常識等の）は使えない」とは、JICAの派遣前研修の折り聞いた言葉でした。首都カトマンズでさえ道路に横たわっている牛や野犬を多く見かけます。一般的なネパール人の家屋にはトイレが少なく共同トイレがあればましです。

ヒンズー教では神様の使いといわれる放し飼いの牛たち、異状なほどたくさん見かける犬たち、そしてトイレのない人たちによる早朝の野外での放尿と排便が、乾燥した風に乗ってほこりとともに大気中に舞っています。また、それらの排便物や生活排水、汚水等はいたるところ破けた上水管や、わりと浅い地下水脈に流れ込み、給水時間になれば多くの繁殖したバクテリアとともに各家庭の給水タンクや井戸に帰ってきます。

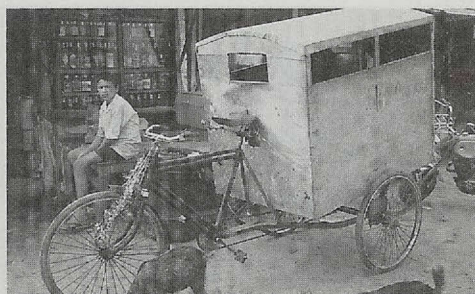
日本という国は無菌室と呼ばれるほど細菌性の病気が少ない国です。その無菌室からやってきた人たちの多くがまずウェルカムシャワーと先達者たちが呼んでいる下痢に悩まされます。それも体質や体調が大きく影響して

おり、わが家の場合妻と長男が着任後1週間ほどで、長女と私はかなり後でその洗礼を受けた記憶があります。腸チフス・コレラ・アメーバー赤痢など多くの感染症にかかりやすい国であり、4月から9月のモンスーン（雨期）には湿気が多くバクテリアの活動が活発になり、カトマンズの病院は収容できない多くの患者が廊下にあふれています。

この状況を知るにつれ海外派遣の希望が不安に変わった人が多いと思いますが、わが家一家4人がネパール生活3年間に、たいした病気もせず帰国していることを報告し、わが家の健康管理の一番の秘訣を紹介いたします。

以前、NHKで「人体」という番組が放送されました。「人の体内には無数のばい菌が人と一緒に共存している。ばい菌は大きく善玉菌と悪玉菌に分けられ、両者の微妙なバランスによって健康が保たれているのである」したがって、悪性の流感が猛威を奮っても規則正しい睡眠と食事ができていれば、体内で増えようとする悪玉菌を、善玉菌がやっつけてくれるのです。

病気の例をひとつあげると、着任して約1年たった頃、健康管理旅行でシンガポール、モルディブ、タイを旅しました。1年ぶりの寿司のにぎりやマクドナルドのハンバーガー（シンガポール）、そして、憧れの海。満腹、南国の暑さ、ホテル暮らし、買物、水泳等で、当時3歳半の長女は不規則な生活リズムと疲労のため腸チフスにかかり、バンコクの病院



スクールバス？（ピラ人）通学時には子供たちであふれる

で10日間入院しました。

この時も善玉菌と悪玉菌のバランスが日常生活のリズムや心体のストレスに関係していることがわかっていながら、大人のペースで旅行し娘を大病させてしまったことに反省が残ったのでした。それと、健康管理のもう一つ大切な要素はストレスの解消法であり、これは個人の性格や趣味などに大きく左右されるので省きます。

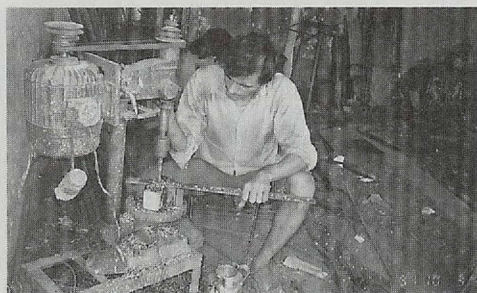
3.2 物 価

ネパールの通貨はルピーです。私が着任した頃の交換レートは、1米ドルが28ルピーで1ルピーが約5円でした。それが、3年後の帰国時になると1ルピーは約2.7円まで下がりました。ここで主な生活必需品の価格を紹介します(1991年5月当時)。

上質米 = 13.5Rs/kg(¥54), 豆 = 25Rs/kg(¥100), 小麦粉 = 8 Rs/kg(¥32), 砂糖 = 15.5Rs/kg(¥62), 灯油 = 8.5Rs/l(¥34), 菜種油 = 50Rs/l(¥200)



妹の子守りをする11歳の姉。友達は授業中



“安全第一”より基本的な衣食住の確保が先決(カトマンズ)

日本人にとってはうらやましい数字が並んでいますが、ネパール国民にとっては食っていくのがやっとの現状です。例えば、私の友人で30歳・訓練指導員・在職8年・子供2人。彼の月給は1,300Rs(¥5,200)です。500Rsほどの家賃を払い、家族を養うのは困難なため家族を田舎に帰し、単身生活していました。

3.3 子女教育

ネパールには全日制の日本人学校はありません。ただ、週1日の補習授業校(小・中学校)を日本人会で運営していました。それも教師経験のない先生が多く、1クラス2~5名の子供たちと家族的雰囲気の中で授業が展開されているようでした。

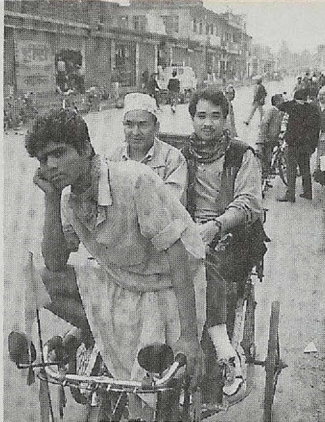
日本人子女が平日に通学している学校は、ほとんどがアメリカンスクールです。授業料、スクールバス利用料等で年間7,000ドルほどかかるのが難点ですが、アメリカ式の教育とでも言うのでしょうか、英語のできないハンディがあっても先生がたの対応がすばらしく、登校拒否になる子はいなかったようです。海外生活と子女教育は、親子の関係、価値観、教育観、経済的問題等があり、参考にしていただく意見を持ち合わせておりません。

3.4 スタッフの雇用

スタッフというのは、いわゆる家政婦、門番、運転手等です。わが家の場合、運転手、お手伝い2人、門番兼庭師の4人を雇っていました。たとえば、「贅沢だな」「奥さん毎日何してたの?」「日本社会へ復帰できたか?」いろいろ意見質問が飛んできました。この場を借りて、現地の人を雇うことのメリット、デメリットを具体的に紹介しましょう。

【メリット】

- ① 情報収集：何がどこで手にはいるか。民主化運動等騒動の原因や対策。その他。
- ② 時間の有効活用：自分で買物や子供の送り迎えをしていたら仕事ができない。



カウンターパートとともにリキシャで移動。
ビラトナガール視察の折、市内観光

- ③ 家族の一員：身近に3年間もいると家族同様になってしまう。これまでは妻が愚痴の聞き役だったのですが、彼らとともに喜怒哀楽を分けあうことができました。
- ④ 雇用費が安い：文化・習慣の違う国での買物、料理、運転ルールを守った運転など、自分でやるとかなりの仕事量になってしまうが、1人4,000円ほどで雇用でき、彼らにとっても収入としては悪くないのです。

【デメリット】ストレスがたまる

妻は私以上にたくさんの仕事があります。特に、着任して1年間は大変で、めったに水浴びさえもしない人たちに薬用石鹸で手を洗うことを徹底的に指導監督することから始まり、雑巾がけの指導、日本料理の作り方、お茶のいれ方等々。日本語しかできない妻から、ネパール語しかできないお手伝いさんたちへの技術移転は、海外派遣で最も大変な仕事と言っても過言ではないようです。

4. あとがき

帰国して、懐かしい同僚や先輩方の多い職場に配属され「久米チャンも国際人やな」と冷やかされることがよくあります。国際人とは、「幸せ」や「ゆたかさ」などと同じように曖昧な言葉のようです。ネパールという日本の昔の田舎を思わせる国での3年間は住めば都でした。もちろん着任後1年間には苦し

いことも不安なこともたくさんあったのですが、どう考えても3年間の間に私たち一家が国際人になった気はしません。下手ながらも英語・ネパール語・日本語を使い分けながらの生活は国際人なのか、ただ少し器用なだけなのか今もわかりません。

先日、職業訓練大学校にて、専門第2期研修を受講した折り、10数年前新任者研修でお世話になった指導学科の森和夫先生の「教育訓練概論」という1年生の授業にゲスト講師として参加させていただきました。そして、30分間ほど「国際社会の中の日本と教育訓練」の授業テーマに沿って、ネパールでの体験を話す機会を得ました。授業後、80名の学生全員が短い感想文を提出してくれました。それらの感想文からうかがえることは、むかし協力隊派遣を夢みた時期があり、ネパールでの生活も協力隊なしでは語れないほどの私の想い入れが学生に伝わってしまったのか、「協力隊に参加して、自分の可能性を試してみませんか」とは言わなかったものの、暗にそれを望む一方的な話になったような反省が残りしました。

海外へ出かけていくことだけが国際社会への参加ではないし、国際援助でもないと思っています。近頃よく耳にする「グローバルな視点」は「宇宙からみた地球」の意味だと自分なりの解釈をしています。

グローバルな視野でアフリカ、アジア、南米など貧困のため困っている人々のもとへ出かけていくことは、勇気がいってなかなか難しいことではあります。

しかし、海外へ志願して出かけていく人たちを送り出すことができるのは、地域社会および日本国内の足場がしっかりしているからです。ということは、もっとグローバルな視点で見れば、地球上で営みを続けている人たちすべてが、地球社会の国際人ではないでしょうか。